

1 1 3 全ての始まりは、髭男の手の意味判断から

《聖マタイの召命》

2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》1599-1600 カラヴァッジョ

* 髭男の左手は、人差し指で自分自身を指差していないし、親指と人差し指をV字に開いた自分自身を指す身体動作でもない。

1 髭男の手が読めなければ、即アウトだろう

従来からの、ローマ・カトリック教会派美術史学者の判断では、髭男の手の意味は、人差し指は、完全に髭男に向かっていないものの、【私ですかの意味だと主張】されている。

一般に、【私を示す身体動作は多種類存在する。】

世界では通用しないが、日本人なら、人差し指を自身の鼻に向ける場面。

大抵は、両手の掌を胸に当てる、片手の掌を胸に当てる、親指と人差し指をV字に開いて胸に当てる、親指を胸に当てる、等だ。

近年、【イタリアでは、人差し指を胸に当てるような、自分自身を示す身体動作としては使っていない】、とする宮下規久朗説が出現した。

実際のところ、この髭男の人差し指は、髭男自身ではなく、45度斜め前の若い俯いた収税吏を示しているということになるが、これはデッサン上明らかに無理があり、誤っている。

つまり、【カラヴァッジョの描く髭男の左手人差し指は、隣の眼鏡男を示している】のであるから、そもそもの【俯いた若者説】は、論理が破綻していることになる。

これに対し、新たに、ローマ・カトリック学派（イタリア派）美術史家・石鍋真澄説では、【髭男の手は、親指と人差し指をV字に開いて自身に向けられている】、と主張している。

これを検証したが、例に挙げられていた、《岩窟の聖母・ルーブル版》の聖母の指差す動作における表現は、V字表現とは認められない。しかし、実例として確かにV字表現例が認められる画例はある。

しかしながら、この【親指と人差し指をV字に開いて】という部分は、この聖マタイの召命に於けるカラヴァッジョの表現の場合は認められないのだ。

何故なら、【自分自身に向けられたV字表現とは、親指と人差し指が、同一面上になければ、意味を為さない表現だからだ。】

もう一度、髭男の親指の方向をよく見て欲しい。

そうなのだ。【カラヴァッジョの描く髭男の左手親指は立てられている。親指と人差し指の両指は同一面上にはない。】

従って、美術史家石鍋真澄説は、客観的に見て、却下されるしかない解説なの

だ。

では、本論に移ろう。

髭男の左手の動作を正しく読み取るなら、「お探しの人は、私ですか、それとも、隣の眼鏡の人ですか」だ。

動作の前半は、親指を髭男自身の胸に向け、動作の後半は人差し指を隣の眼鏡の人に向けた瞬間のシーンなのだ。つまり、2段階連続質問の場面なのだ。

【髭男は、イエスに対し、選択を求めている。】

【だからこそ、イエスの左手は、質問に応答して掌が開いているのだ。】

仮に、【髭男が正しく誰かを指差したり、髭男が自分自身を指差し、その本人であるなら、イエスはただ大きく首を上下にひねり頷けば良いだけの場面であったはずだ。】

2者択一の質問をされたイエスは、正確に召命相手を伝達する必要が生じ、三段階の回答動作が必要になったという流れなのだ。

こうしてみると、【カラヴァッジョは、リアリズム表現を駆使しながら、絵画上の高度な論理的理解を観衆に求めている】のだ。

カラヴァッジョに対して、故コンタレッリ枢機卿の絵画内容の指南書には、細やかな指示があったようだが、カラヴァッジョは、その要望に率直に答えている。

つまり、カラヴァッジョとしては、一抹の疑問なく、的確に召命相手が分かる内容の絵画を注文側に提供したのだ。

そして、当時この絵を見た、観衆の側にあるローマ・カトリック教会派美術史家であるベッローリには、正しく理解するだけの能力がなかったのだ。

そうして、400年以上、ローマ・カトリック教会は、カラヴァッジョ作《聖マタイの召命》1599-1600 の誤解説を世界に発信し続けている。

[PREV](#) ← ● → [NEXT](#)